

山形国際ドキュメンタリー映画祭

珠玉の34本を銀幕で上映

竹林紀雄



たけばやし・のりお 文芸大教授、映像作家。1958年、福岡県生まれ。立教大学大学院修士課程修了。84年、日経映画社(現・日経映画監督協会理事、文化庁芸術家像)入社。テレビ東京、日経CNB 行委員会委員などを歴任。

山形国際ドキュメンタリー映画祭が10月5日から12日まで山形市で開催される。1989年から隔年開催で今回はコロナ禍でネット上のバーチャル開催だったが、18回目の今回は銀幕で体感できる。映画関係者と観客が触れ合い、映画談議する名物の交流クラブも装いを新たに復活。インターナショナル・コンペティションとアジア千波万波の審査2部門に合計で120カ国・地域から2134本の応募があり、選ばれた34本が上映される。また日本の映画史に残る数々のドキュメンタリーを撮った野田真吉監督の特集などさまざまな企画上映も行われる。

型にはめぬ寛容さ

匠たちの新作を披露する場となってきた。新しい才能を見いだす映画祭でもある。後にカンヌ国際映画祭の常連となる河瀬直美監督が注目を集めるきっかけは山形だった。

型にはめぬ寛容さ

テレビに軸足を置いてきた筆者だが2007年の第10回以来、山形に通い続けている。その魅力を端的にいえば、ドキュメンタリーを定義せず、型にはめない自由な雰囲気と多種多様な作品を認める寛容性だ。ドキュメンタリーを掲げているが、実験映画やアート映像作品も受け入れている。

資金力の弱い個人やインディペンデントの作品にも門戸は開かれている。大賞作は米アカデミー賞長編ドキュメンタリー部門へのエントリー資格が与えられる。つまり、世

「世界の今」に向き合う



界に向けた可能性を開く場でもある。

さて今回も「世界の今」をとらえた作品が注目される。インターナショナル・コンペティション部門には、ロシアの侵攻を受けているウクライナからも2本が選出された。まずは、イエウヘン・ティタ

レンコ共同監督がボランティアの救護隊員として従軍し、6カ月間にわたって記録した「東部戦線」。戦場の静と動、そして人の生と死。救護隊員の視点から戦争の凄惨さと戦時下の現実が描かれる。「三人の女たち」はウクライナ西部を縦断するカルパチア山脈の麓の村が舞台。1年間の撮影を終えて本作を編集中にロシアの侵攻が始まった。侵攻前、この地には戦争など夢にも思わない暮らしがあった。ここでマキシム・メルニク監督は3人の女性にカメラを向けた。戦前の厳しくも牧歌的な暮らしへのオマージュともいえる作品となった。

映画「東部戦線」から。ロシア軍の侵攻と向き合うウクライナ兵

イランド」が面白い。ゲーム空間に取材クルーが潜入し、仮想空間のアバターと現実空間の音声でドキュメンタリーを展開する。

アジアの若手が対象のアジア千波万波部門では、クーデターで実権を握った軍政が市民を弾圧しつづけているミャンマーからの匿名監督の短編2本が異彩を放っている。

「負け戦でも」と「鳥が飛び立つとき」のいずれも、自由を奪われたヤングゴンの若い世代の心のうごめきが描かれている。

それ以外にも、ドキュメンタリーの新たな可能性を感じさせる国際基準の作品が勢ぞろいした。

筆者は4年前に続き、今回も審査委員を務める。足立正生、水谷俊之両監督と共に担当するのは日本映画監督協会賞。90年近い歴史を持つ同協会が、2009年に国内外の新しい才能との出会いを願って設置した賞だ。



山形国際ドキュメンタリー映画祭は世界の現実と向き合うなかで、映像で何が出来るのかを問い続ける。そして、戦争、差別、貧困の無い世界を希求し続けるのだ。

◆

*山形国際ドキュメンタリー映画祭(YIDFF 2023)は5、12日、山形市中央公民館などを会場に開催。詳しくは同映画祭HPで。

文化